

句集

手
花
火

榎
崎
あ
さ
こ

序

あさこさんとは添削指導の一人としてご縁が生まれた。みのるの添削が何よりの愉しみだとおっしゃって下さり熱心に句稿を送ってこられた。

七年ほど前のことになるが全く添削が届かなくなり事情をお聞きすると、ご主人亡きあとずっとあさこさんを支えてこられたご長男が突然倒れられそのまま急逝されたという。あまりにも過酷な宿命に私は慰めてあげることばさえ見つからなかつたが、その耐えがたい哀しみと悲鳴を彼女は俳句に託して耐え忍ばれたのである。

逆縁の涙乾かず風花す

逝きし子の部屋そのままに夜の寒し

ご家族の懸命の励ましで再び俳句を詠まれるまでに回復されときはほんとうに嬉しく、あさこさんの俳句と向き合う姿勢に敬服しました。同時に俳句には慰めと癒やしの力があり、やがてそれは希望と勇氣に変えられるのだと確信しました。

春を待つ遺影に語りかけもして

春眠の夢に微笑む亡き子かな

京都嵐山で吟行したときにご長男の奥様（智恵子さん）を伴って参加された。あとで分かったことであるが智恵子さんはお義母さんの励ましになればと思っただけで、あさこさんは俳句にふれることで智恵子さんの哀しみが少しでも和らぐようにと祈って誘われたという。またご長男の書齋には俳句の本がならべられていて、おふくろと一緒に俳句を詠むように…

と、生前に智恵子さんに勧められていたという。心温まるエピソードに感動した。

といふ間に吾はや卒寿屠蘇の酔

昨年は念願のみのである庵来訪も実現しました。新神戸駅までお迎えに行き、あさこさんの笑顔と再会できた時はほんとうに嬉しかったです。まだまだお元気なあさこさん、ご主人やご長男の分まで長生きして天国のお二人へ届く詩を詠み続けて欲しいと切に願います。

平成三〇年七月吉日

やまだみのる

每日句會入選句

凝りたる道なころびそ医者通ひ

誕生日ワインで祝ふ蟹料理

吾のためと一族郎党蟹料理

裏畑に燃ゆる古木の柿紅葉

野路愉しバツタが吾を先導す

蟋蟀の輪唱やまず夜は更くる

立ち上がるときが難儀や草を引く

わが肩にとどまらずして紅葉散る

たたづめば瀬音高鳴る紅葉谿

秋桜風にあち向きこつち向き

朝窓のカーテン煽る風は秋

酔芙蓉白無垢なりしあしたかな

マツサージ機を頼みとす梅雨籠

一陣の旋風菖蒲田一大事

鰐広を被り一病隠しけり

口開けて吾に媚びくる鯉涼し

紫陽花の左右になだるる切り通し

手花火の終の玉とぞ惜しみけり

就活のスーツの徒らに若葉萌ゆ

ゆくりなく子鹿と出会ふ山路かな

山藤の屑こぼす道逍遥す

赤と黄と園ニ夕分けすチューリップ

病棟の窓に展けし花の雲

点滴の落つるを見つめ春に病む

のどけしや窓に展ける多島海

朝窓を繰れば一面雪景色

蠟梅をこぼさぬやうに鋏入れ

門松の竹の切つ先潔し

出入りは慣れし裏木戸実千両

といふ間に吾はや卒寿屠蘇の酔

銀色の水脈引く巨船沖小春

湯気吹いて鉄瓶怒る囲炉裏かな

野路の秋ドライブ兼ねて蕎麦食べに

目印に水車の廻る新蕎麦屋

木犀の香に誘はれて庭に立つ

秋晴れや杖を供とす足軽し

庭景色一変したる松手入

竿竹に白布かければ赤とんぼ

夕さりてほのと色変ふ酔芙蓉

髪洗ふ母の齡を超へし朝

クーラーを上手に使ひ暑に耐ふる

コスモスの紅白風に交錯す

片蔭をジプシーしつつポストまで

梅雨明けの売り場がらりと模様変へ

健康が何よりの幸冷奴

濃紫陽花色とりどりに池塘染む

半どんの町にちらほら浴衣の子

マッサージ機に身を委ね梅雨籠

新茶汲む家事といへどもマイペース

庭師らの鋏使ひの音うらら

石楠花の梢洩る日に開きそむ

雨がくるぞと囃しそむ蛙かな

清楚かつ清しき白や利休梅

夜桜や裸電球数珠に吊り

池長閑しきりに鯉の跳ねる音

啓蟄や道路工事の騒がしき

風花の逆舞ふ道を帰りけり

山道に尻もちついて蓬摘む

潮引けばあをさに染まる河口かな

憂ひなき汝れの面輪よ古雛

洗濯物叩き取り込む黄砂かな

亡き母と尋ねし園の梅探る

植木市隣の路地は骨董市

ウオーターフロントといふ梅の園

空店舗ばかりの路地や春遠し

折鶴のごとくに折れし葱きざむ

初句会なればと豪華レストラン

物干しの氷柱に肩を打たれけり

冬籠郵便受けを覗くだけ

梵僧の師走行脚の列長し

海光のあまねくわたる蜜柑狩

実南天たわわに揺るる厨窓

紅葉峡奈落の茶屋に憩ひけり

あつあつのお茶が馳走や冬の朝

青竹の筧さ走る秋の水

翳雲水平線に湧くごとし

月蝕や灰かに匂ふ石榴の実

秋桜あち見こち見し揺れやまず

子ら嬉々とコスモス園にかくれんぼ

地団駄を踏みては栗を拾ひけり

庭掃けば箒の先をばつた飛ぶ

頬撫づる風に気配や庭の秋

抽きんでしひまわり園の風車小屋

向日葵の園の迷路に迷ひけり

門涼し大水鉢に蓮の花

鮫避けの網を張られて海開き

二円切手買ひ足しに行く暑さかな

播く餌に群れ来る鯉の影涼し

草引きてマツサージ機に居眠りす

木の橋の欄に憩ひて風涼し

雪の下埋めつくせしなぞへかな

バクダンに非ずポン菓子祭路地

佇つ吾に舞ひ寄る蝶は亡き子かも

矢のごとく出入りせはしき軒つばめ

蟻すすむ身の丈越ゆる餌を担ぎ

ベンチいま座る余地なく落花敷く

春眠の夢に微笑む亡き子かな

園児らに道を譲りぬ踏青子

啓蟄や真夜の地震に目を覚ます

南縁を全開したる雛の宿

散策の道に踏むまじいぬふぐり

潮騒の間遠に聞こゆ梅の丘

囀を道案内に園巡る

真夜に覚む屋根より墜つる雪の音

水温む鯉はジャンプを繰り返し

春を待つ遺影に語りかけもして

老い吾に背を伸ばせとて大冬木

蠟梅の朝日をふふむ雨の珠

混み合へる成人の日の写真館

出初め式五輪の色の水を撒く

オリンピッククまでは生きねば屠蘇を酌む

杓をもて割る蹲踞の初氷

新暦世界遺産の逆さ富士

灯台の見ゆるなぞへに蜜柑狩

浮き雲や土手の並木の冬紅葉

車椅子多し小春の遊歩径

立ちがたし日向ぼこりのお尻に根

気合入れ着膨れの腰上げにけり

公園は廃校跡てふ冬桜

同胞を悼みて集ふ秋天下

一湾を占めてひろがる牡蠣筏

黄落や六百年の大公孫樹

禅寺の結界殊に紅葉燃ゆ

松手入れ終え一服の茶の美味し

多島海隈なく覆ふ翳雲

同齡の訃を聞きてより愁思憑く

崩れ伏し歩道を塞ぐしだれ萩

曼珠沙華燃ゆ石庭の一隅に

地団駄を踏みて毬より栗を出す

新米と大書され着く宅急便

栗供ふ亡き子に声をかけもして

片腕の痺れてゐたり昼寢覚

干し物を取込む竿に赤とんぼ

朝戸繰る吾に新涼の風通ふ

蜘蛛の囿の破れ放題や晩夏光

鬼の顔見よとをこぜの姿盛り

夜半の雨晴れて朝の風は秋

草取りに曲りし腰をマツサージ

瀬の石に遊ぶ沢蟹見て飽かず

重き腰あげて選挙へ炎天下

向日葵のうなだれてゐる運動場

磯遊び子らの喚声何ならむ

肩寄せて覗き入る子ら夜店市

開け放つ座敷に通ふ風涼し

老鶯の茶室に聞こゆ至福時

鯉跳ねし波紋涼しく広がりぬ

老の膳ままごとほどの木の芽和

海光の届きし丘や花蜜柑

老いどちら口だけ達者溝浚へ

多彩なる若葉が馳走カフエテラス

逆縁の吾が子を偲ぶ子供の日

子ら去にてより春愁の憑きにけり

咲き揃ふムスカリの葉を散髪す

検査また検査の日々に春愁ふ

春寒く覚めたる寢床出で難し

道問へばコート
の女土地訛り

共に老ゆ 幼馴染や 梅白し

人波にもまれるだけよ 苗木市

紫の濃きが 売れ筋ヒヤシンス

冴返る屋台の裸電球も

鯛焼きの数珠なす列に吾も並ぶ

平凡がなによりの幸春炬燵

足踏みのごと新雪の道進む

旅の地図ループで探る春炬燵

唄ひつつ下校の子等や春隣

立ち尽くすお巡りさんの寒からん

薄氷の虜となりし紅落葉

真中より火の舌のびるとんどかな

七草やままごと程の菜をきざむ

去ぬ吾子を見送る門に風花す

路地越しに白息交はす気安さよ

庭柚子を贅に浮かべて至福の湯

カレンダー並べ選ぶも年用意

庭蜜柑手入れのあひに摘み食ひ

久闊を叙す相互ひマスクして

叶ふなら龍の玉ほど弾みたし

橋半ば錦秋の溪パノラマに

目つむれば遠き日の夢日向ぼこ

花舗の土間賑はしてゐるシクラメン

古民家へ轍のつづく草紅葉

親よりも夫よりも生き夜の長し

下校児を包む野焼きの煙かな

白塀にりりしき影や貴船菊

裏庭に鶉騒がしき小春かな

秋晴の日だまりに混む鳩雀

庭の柿甘し亡き子を悼みけり

逝きし子の部屋そのままに夜寒かな

庭師らの去りたる庭に秋蝶来

裏畑の柿に盗賊鴉どち

高低の脚立ふたつや松手入

骨董市手持ち無沙汰や秋日和

猫じやらし一輪挿しに二三本

其処ここに彼岸花燃ゆ千枚田

式部の実枝うち重ねたわわなる

露草に励まされゆく山の道

老い認め難きと思ふ敬老日

湯気匂ひくる炊きたての栗御飯

ちちろ鳴く安否問はるる電話口

樋溢れ簾をなせる大夕立

まず吾子に供ふ炊きたて今年米

過去帳に子の名を記す秋の夜

マツサージ至福の時や夜の秋

日の温み宿すいちじくもぎにけり

苦瓜の一つ高きに残りけり

飛び石のすぐに乾きし夕立かな

甲子園果てたる空に秋茜

寧かれと逆縁の子の初盆忌

遠花火音だけなれど庭に立ち

遠雷の一つきりにて終はりけり

朝まだきより輪唱す蟬時雨

おしやべりをしてはかどらぬ草取り女

路地ゆけば吾にぶつかる秋茜

夏来れば逆縁の吾子想ひだす

芋の葉にまろびし朝の露の珠

睡蓮の影を揺らして鯉進む

曲りたる胡瓜も幸よ自家菜園

梶子の白夕闇にしるきかな

あめんぼう鯉の波紋を避けられず

サボテンの四方八方花広げ

開き初む亡き子の植ゑし京鹿子

葱坊主はじけて虻を集めけり

干し物の白翻へり風光る

山吹の八重に一重に黄を重ね

天降るごと城壁に散る桜かな

中腹にひときは白き山桜

葱坊主擬宝ちぎつてみたきかな

春潮に委ねて揺るる舫舟

命見よ石の隙より仏の座

庭あちこちいま水仙の花明かり

春嵐路地にばけつの転ぶ音

矢印に従ふ小道馬酔木咲く

納骨の読経聞く吾に春寒し

高垣をなせるは椿銀閣寺

納骨を済ませし安堵京しぐれ

モナリザの口許に似し古今雛

日表の紅梅がまずほころびぬ

鳥語吾を誘ふごとし梅探る

セーターの腕を巻き上げ採血す

深雪積むまたも商店一つ失せ

薄氷の虜となりし柄杓かな

冴ゆる夜の黒柱きしむ音

甘酒を双手包みにいただきぬ

忌を修し終えし安堵や風花す

逆縁の涙乾かず風花す

手に享ける竜の口より寒の水

通過する黄色の電車風花す

寒椿活けて亡き子の忌を修す

洗濯機凍てて廻らぬあしたかな

古都も奥北山杉にしぐれけり

冬日燦磨き並べし杉丸太

高塀を越ゆる皇帝ダリアかな

身に入むや晨朝に友召されしと

鴨の陣近寄り見ればみな四散

虻たちの協奏曲や石落日和

内海の島々煙る初時雨

ゴルフ場訪へば休日日向ぼこ

早くゴミ出せと目覚まし朝寒し

対岸の灯は灯台か霧の海

秋日さす小窓酒蔵コンサート

ゴルフ打つ葛の奈落へ曲がりけり

秋晴れの沖に散らばる漁り舟

秋祭り人垣ばかり何も見えず

錦してアメリカ楓の並木道

一宿の山家の幸は零余子飯

野路遠近 粃殻焼きの煙立つ

どんぐりを踏みてよろめく齡かな

寝ね難き秋の夜刻む古時計

七輪に備長炭や秋刀魚焼く

秋茄子の不揃ひなるを収穫す

曼珠沙華庭の一隅炎へみたり

晩学の拡大鏡や秋灯下

万緑にダムのおつり橋撓みけり

玄関を開ければ蟬の仰向けに

蟬時雨シャワーのごとし樟木立

採血の部屋の窓辺に白き百合

庭手入れかたばみの根を深く掘り

独り居に朝採れ胡瓜お裾分け

手入れ良き庭にころがる実梅かな

夏の蝶抗ふごとくもつれけり

山水に育ちて清し花菖蒲

大屋根を易易と越え夏の蝶

あとがき

全てみのるさんが取り仕切ってくださいってあっというまに句集が出来上がりました。ほんとうに嬉しく夢のようで感慨ひとしおです。

地元三原の句会が会員の高齢化で解散になってしまいましたときに長男がインターネットで『ゴスペル俳句』を探してくれました。添削指導の学びは、必ず届いたその日の内に返信して下さるのでとても励みになり毎週のように句稿を送りました。平凡な私の句を魔術師のように添削してくださいるので句稿が帰ってくるのが本当に楽しみでした。

みのるさんが広島にお越しになったときに何度か吟行にも誘って頂きました。長男亡きあとの私を励ますためにわざわざ三原まできて吟行してくださいました。そして

昨年は念願のみのる庵にも招いてくださいました。こんな素晴らしいご縁を頂きましたこと
いくら感謝しても足りません。

九十歳を過ぎますと吟行も出来なくなり思うように句も詠めなくなりましたが、この句集
を余生の励みにして細々ながらも俳句を続けたいと思えます。みのるさんには丁寧な序文
を書いていただきましてありがとうございます。心よりお礼申し上げます。

平成三〇年七月吉日

檜崎 あさこ

『手花火』 檜崎あさこ句集

平成三〇年七月三〇日 印刷

平成三〇年七月三〇日 発行